

東京大学大学院総合文化研究科教授

ロバートキャンベルさん

飽くなき探求と淘汰の先に

日本文学の研究を軸に、情報番組のコメントーターやクイズ番組の回答者など幅広く活躍中のロバートキャンベルさん。日本文化に対するその造詣の深さに、感服した方も少なくないだろう。アメリカ人であるキャンベルさんが、なぜ、日本文化に傾倒していったのか。その経緯を伺った。



——キャンベルさんは現在、東京大学大学院で江戸後期から明治前期の日本文学をご専門に研究されていますが、そもそも日本に興味を持たれたのはいつで、そのきっかけは何だったのですか。

決定的な瞬間というのはありません。私はニューヨークで育ち、両親の仕事の関係でしばらくヨーロッパで暮らした後、帰国したのですが、当時のニューヨークは今と違ってかなり治安が悪かったのです。ですから、両親はニューヨークでは子どもを育てられないと判断し、カリフォルニア州サンフランシスコに移り住むことになりました。

同じアメリカでも、東海岸と西海岸は気候も風景も全く異なります。私はイギリスやフランスでも暮らしましたが、カリフォルニアではそれ以上にカルチャーの違いを感じました。言葉についても、ニューヨークの下町で習得した私の英語と違って、カリフォルニアの英語は透明でなまりがないんです

PROFILE

1957年、ニューヨーク生まれ。カリフォルニア大学バークレー校卒業後、ハーバード大学大学院で東アジア言語文化学科博士課程修了、文学博士。1985年に九州大学文学部研究生として来日。同学部専任講師、国立・国文学研究資料館助教授を経て、2000年に東京大学大学院総合文化研究科助教授に就任。2007から現職。近世・近代日本文学が専門で、特に19世紀（江戸後期～明治前期）の漢文学と、漢文学と関連の深い文芸ジャンル、芸術、メディア、思想などに関心を寄せている。テレビでMCやニュース・コメンテーター等を務める一方、新聞雑誌連載、書評、ラジオ番組出演など、様々なメディアでも活躍中。主な編著に『ロバート キャンベルの小説家神髄—現代作家6人との対話—』（NHK出版）、『読むことの力—東大駒場連続講義』（講談社）、『Jブンガク—英語で出会い、日本語を味わう名作50—』（東京大学出版会）がある。

ね。日本で例えるなら、大阪の河内弁の子どもが東京に転校してきたようなイメージでしょうか。そんな私のことを、皆がおもしろがつてくれました。

私の通っていた高校には、東アジア系の学生がたくさんいました。ほとんどが中国系、それも50年、100年前に、労働者としてアメリカに渡ってきた人たちの子孫で、家庭では広東語を話す人たちでした。彼らが将来仕事をする上で北京語が必要になるだろうということから、高校では外国語の授業の選択肢として北京語がありました。

私は高校2年の時、その授業を取ったのですが、白人はたった一人なんです。一緒に遊んでいたアフリカ系や白人の友達の中には、誰も中国語を学ぼうという人はいない。転校してきた私が、事情がよくつかめないまま北京語の授業に出たら、生徒は全員中国系だったのです。

——それは驚きますね。

でも、中国語の授業はおもしろかったです。中国の文化は偉大で奥深いものだということがわかりました。

その一方、私は映画や建築、ファッションなどビジュアルなものに興味を持っていました。本を読むことも好きだけでも、目

でいろんなことを感じるのが好きだったので。そうすると映画がすごくおもしろいなど。

1970年代当時、地元の単館映画館で小津安二郎など戦後の日本映画をよく見ていました。とりわけ印象に残っているのは、黒澤明監督の作品だけを集めた映画祭です。戦時中のプロパガンダ的なものから戦後の黄金時代まで十数本、そのシリーズが映画として純粹におもしろかった。

でも、映画を見ても絵画を見ても、言葉がわからないと十分に楽しめないし、鑑賞できないということ、大学入学間もない頃、先生に言われました。

——絵画についても、言葉が必要だと？

はい。教養課程の日本美術入門の先生に「私はこれから日本の絵を見ていこうと思うけれども、どうすればいいですか」とアドバイスをもらいに研究室を訪ねたところ、「とにかく先に言葉を覚えろ」と。「絵の中にある人々の声に、目だけでなく耳も傾けなさい。そのためには、絵を支えている世界の言葉を身につけなさい」と言われたのですが、私には全くわけがわからない。私は「絵は誰でも言葉抜きに理解できるじゃないですか」と盾突いたのですが、先生から「それは愚かです」と。

絵の中にある人々の声に、
目だけでなく耳も傾けなさい

それでたまされたと思って、大学1年修了後の夏、初級日本語の集中講義を受けることにしました。英語で「インテンシヴ・コース」と呼ばれるその集中講義は、修得する言語に首までどっぷり浸る形で進められます。私は「2カ月だけだから、相性が悪ければご縁がなかったということ、秋から別のことをすればいい」くらいの気持ちだったのですが、受けてみるとすぐおもしろかったんですね。これは扉を開けて擦^{こす}つてみる価値があると直感的に感じ、そこから歯車が回り始めました。



扉を開けて擦^{こす}つてみる価値があると直感的に感じ、そこから歯車が回り始めました

——なるほど。いくつかの過程を経て、少しずつ日本に対する興味を深められていったのですね。それで、初めて来日されたのはいつだったのですか。

大学3年修了後、1年間休学して語学留学しました。留学先は「IUC（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター）」と呼ばれる、アメリカ、カナダの大学院レベルの学習者を対象にした日本語教育機関です。いわゆる知日派と言われる日本エキスパートの、自分ではあまり言いたくないですけども、登竜門で、多くの研究者や外交官を輩出しています。日本語の能力を仕事ができるレベルまで上達させることに特化していて、朝から晩まで徹底的に日本語を書く、読む、話すことを繰り返しました。

IUCは現在横浜にあります。当時は東京・麹町にあったので、私は授業の合間に国立劇場で芝居を見たり、国会図書館に行ったりしました。ニューヨークにも大きい図書館はありますが、国会図書館のような場所はありませんからワクワクしましたね。

それに、文庫本というのは日本独特の文化なんです。

——えっ、そうなんですか！

アメリカにもソフトカバーの本はありますが、あの形状の本はありません。日本では本屋さんに行くと、ずらっと同じ色の表紙で、ア行から五十音順に並べられた文庫本の中から、自分の好きな作家を探して、皆がそこで立ち読みをしたりしている。これは私にとってカルチャーショックでしたし、早く原文で読めるようになっていたと思いました。

——日本人にとっては当たり前の光景が、さらなる学習意欲をかき立てたとは…

東京滞在中で濃厚な体験をしてアメリカに帰国すると、大学卒業後の進路をどうするかを考えなければなりません。私は都市経済にも関心があったので、それに関わる仕事も頭をよぎったのですが、一方では、美術史や文学、歴史などを研究したいという思いもあり、どちらにしようか迷っていた。その判断をする時、参考になったのが、留学中に会った人たちの生き方でした。

——具体的には、どういうことですか。

日本人は自分の職場に忠実であろうと仕事にしばりつけられていて、企業戦士という印象が強かったのですが、私が留学中に出会った人たちの中には、クリエイターをはじ

日本人って、職場から一步離れば、 こんなぶっ飛んだ自由な発想をするんだ！

め、例えば古い本にこだわって初版本をずっと集めている人や料理にすごく凝っている人など、働しながら自分の趣味を極めている人がたくさんいましたし、彼らの話はとても興味深かった。

彼らと出会って「日本人って、職場から一步離れば、こんなぶっ飛んだ自由な発想をするんだ！」と知って、日本人のイメージを塗り替えられましたし、自分も今できること、やりたいことを優先してやったほうがいいかなと。プラクティカル、すなわち「実学」を全部捨てて「虚学」のほうに舵を切ったという決めました。それで、私が最も関心を寄せていた日本文学を学ぶことができて、家族が住む東海岸にあるハーバード大学大学院に進学しました。

その後、1985年に奨学生として九州大学文学部に留学されたのですね。

そうです。ハーバード時代にずっと読んでいた本の著者である中野三敏^{みづし}先生が、九州大学の教授をされていたので、手紙を送ったところすぐに返事が来まして、どうぞいらつしやいと快く受け入れてくださいました。周囲の人たちからは、九州に何をしに行くのかと不思議がられましたけど、私は「その先生がいらつしやれば、何でもできる」と思っ、半年か1年くらいのつもりで再び来日しました。

——東京でいろんな刺激を受けた後に九州へ行くと、物足りなく感じませんでしたか。専門でやりたいことを決めて、研究者の

卵のつもりで乗り込んでいたので、物足りないという感覚はありませんでした。

九州大学文学部の研究室は、戦後のこれと言った特長のない建物の中にあるんですね。しかし、大学院生が集まる部屋の真ん中には大きな長机が置かれていて、いつでもそこに来て勉強ができるようになっていきます。私が初めてその扉を開けた時、7人くらいの大学院生が同じ机に向かって黙々と勉強していました。自分と同世代の人たちが研究に没頭しているというのが、波長ですぐにわかったのです。その落ち着いた雰囲気がとても気に入りました。

研究の進め方も、皆で一緒に出掛けていつて調査する共同作業の研究と各自の研究を、両方バランスよくやるんですね。ハーバードでは、ゼミで一緒に考えたり議論したりするけれども、それ以外は個人が各々の場所勉強していましたから、こういう学び方もあるのかと新鮮でした。

だから、私は福岡の街というより、研究室がよかったですね。共に学んだ仲間たちも今では国立大学や私立大学の教授となっていますが、その頃できた絆と言いますか、つながりは今でも続いています。

——福岡の街はいかがでしたか。

福岡も東京も初めて来たのは8月で、日本を好きになることが一番難しい時期でした。そのため、福岡に来た当初も街や風景から魅力は感じなかったのですが、1カ月ほど経って、暮らす目線から福岡を見直すこ

とができるようになると、とてもいい街だというのがわかってきました。

私が下宿していたのは日本三大八幡宮にも数えられる^{はちまんぐう}宮崎宮の参道の真ん前でした。宮崎宮では毎年9月に「放生会^{ほうじょうかい}」というお祭りがあつて、その時はたくさん屋台が出て、九州中から人が集まってくるんですね。私の下宿は2階の角部屋で、窓を開けると祭りの賑わいが全部見下ろせるので、できたばかりの友達や知人を呼んで、ちよつとしたパーティーを開いたりしていました。

そうやっていろんな人に出会って、福岡の人々の温かさや優しさ、ユーモアなんかは、じんわりと惹かれていきました。

——それで結局、福岡で11年過ごされたところの間、アメリカに帰ろうとはならなかったのですか。

ありがたいことに仕事の話はいくつも頂いたので、私は18世紀から19世紀の江戸文学を専攻していて、くずし字で書かれているような原本を見て研究しています。すると、アメリカに帰って江戸文学を研究しようとしても、誰かが選り取って編集した資料、つまり「二次資料」に拠^よりながら、自分の研究をしなければなりません。それではオリジナリティが打ち出せない。

九州では、あちこちに江戸時代の本がそのまま残っています。どんな小さな藩でも、家臣たちのための藩校があつて、その藩校の蔵書がそっくりそのまま、神社であつたり、教育委員会であつたり、どこかに眠っていま

たくさんのがそぎ落とされ、 残ったものが現在の自分だと思っています

す。今やほとんど分類されて目録があるんだけれども、私が九州にいた頃は手つかずの蔵書もたくさんありました。

そこには、200年くらい前の人々が興味の赴くままに集めた本が、タイムカプセルのように残されています。近代的な十進法によって知識が分類されていないから、江戸時代の人々がどのような思考で集めたり、読んだり、仕分けしていたのかを知る手がかりになります。

——それは大変貴重な資料ですね。

アメリカに帰れば、自分が発見した本であつたり、人物であつたり、出来事であつたりということと接点が切れるような気がしたので、できれば日本で仕事をしたいと思っていました。ただ、そうは言っても、妥協はしたくありません。

日本に住む外国人の中には、英語を教えながら自分の研究を深める人も多くいましたが、私はそうするくらいなら帰国すると決めていました。自分がやりたいことをやって給料が頂けるのであれば、日本にいたい。でも、そのために違うことをするのであれば、帰ったほうがいいと。

——自分のやりたいことを、明確に把握されていたんですね。

私は大阪の友達によく「粉をかけ過ぎてい」と指摘されます。いろんなことをやり過ぎていという意味ですけども、高校から大学時代には今の何倍速もの勢いで、いろんなことに手を出していました。その中か

ら、たくさんのがそぎ落とされ、残ったものが現在の自分だと思っています。その柱となっているのが、日本文学であり、日本語です。柱がいつの間にか屋根になって、私のアイデンティティになっていきました。「人生の幹」と言ってもいいかもしれない。専門分野についてもそうですし、人間関係でもそうです。

だからプロセスですね。一つの決定的な瞬間やきつかけというのはなく、何があるのかな？と少しずつ擦りながら奥に進んで、惹かれていつて、手応えを感じたり、褒められたりすると調子に乗って、その中でまたいろんなことをやってみるうちに、今のような仕事に辿り着いたのです。

——ご自身が興味のあることを突き詰められた結果が、今日のお姿なのですね。それにしても、キャンベルさんの日本に対する造詣の深さにはただただ感心させられるばかりで、自らを反省することしきりなのですが、日本人は勉強不足だと感じられることはないのでしょうか。

私は、日本人は勉強熱心だと思います。一生懸命勉強することが生き方として正しいと心から思っている人が、大多数ではないでしょうか。

ただ、何をどのステージで勉強するかは、時代によって違うと思うんですよ。戦後は社会を再生させるために、アメリカや西欧を参考にしながら、様々な制度を作り直したりしているわけですね。

その中で、日本人が当たり前に感じている立ち居振る舞いや言葉、それらを裏付ける歴史的出来事や状況を見つめ直すことも必要だったはずですが、この部分については勉強不足感が否めません。それ以前に、言葉にして人に伝える練習や話し合う場というのが非常に少ないように感じます。

日本とは何か、日本人はどのように考えているのかと尋ねると、公約数的なことは答えられるけれども、具体的にそれがどうしたことなのかは答えられない。それは、今まで語り合う場にあまり出入りしていないことに起因しているのではないのでしょうか。

——語り合う場ですか？

そうです。日本人は「インバウンド」つまりいろんなことを取り込むのは、とても上手ですよ。けれども、自分たちの思いであつたり、立場であつたり、歴史でもそうですが、伝える、発信することに関してはどうでしょうか。自分が伝え、相手が伝え、歩み寄って初めて個人と個人の接点ができるはずですが、言葉にして伝える、考えるという場が、学校教育の中で軽視されているような気がします。特に近現代史ですね。

——それはおっしゃる通りだと思います。

今、日本人に最も問われていることは、明治から大正、昭和の占領期までの日本で何があったのかということです。日本人は社会として、国家として、生活者として、この時代に何があり、それが他者との関係においてどのような意味、どのような結果をも



たらしめたかということを、足場として持っていないんですね。ですから、議論するにしても、誤解を解くにしても、反省するにしても、まずスタートラインに立ち得ていない。

それは、あの難しい時代のことを学校できちんと教えていないからです。小学校でも高校でも、近現代史は1週間くらいでサッと終わらせています。19世紀末から20世紀の世界史の舞台の上で、日本がいくつものアクションを起こして、自分たちに対しても他者に対しても様々な影響を及ぼしたにもかかわらず、その足場を一人の日本人としてなぜ描けないのかということを、私は不思議に思っています。

——日本の歴史や文化を勉強する機会がないからということでしょうか。

機会がないというよりも、日本的ものは既に生活の中にあるから、改めて言語化

日本人が当たり前前に感じていることを言葉にしていこうとする心掛けが大事なのかなと思います

するまでもないと思っていますのです。

よく言われるのは、日本人は「言挙げ」^{ことあげ}をしないということです。人と人の間には対立や競争、競争があつて初めて言葉が生まれます。他者との関係の中で、自分はどのような文化で育ち、何を大切に生きていくのかを意識化され、言葉として形を決めていくんですけれども、日本ではそれを必ずしもしなくても、それぞれの地域の中で生きていくことができたわけです。それは日本の一つの強さでもあつたと言えるでしょう。だけれども、成熟した今の段階でそのような見のままで、大切なものが失われていくような気がするのです。

——大切なものとは何ですか。

日本のよさやおもしろさ、気づくべき課題や限界も全部含めて、日本の中で息づいてきたもの、培われてきた感性などです。ですから、日本人が日本で暮らす中で当たり前に感じているこれらのことを、棚卸しして、言葉にしていこうとする心掛けが大事なのかなと思います。

簡単に言えば勉強するということです。何でもいいんですよ、勉強の仕方はいろいろあるから。歴史であれば、歴史小説や時代

小説を読んでもいいですし、歌舞伎の世話物なんかを2〜3回見れば、市井の雰囲気や息遣いを感じることができるようでしょう。

——グローバル時代においてはより一層、自分の足場となる歴史や文化を知り、語れるようになることは大切ですね。

ところで、日本で暮らされていて、ちょっと理解に苦しむなというようなことはありませんか。

今は見かけなくなりましたが、昔は新幹線の中で白いハンカチを顔に載せて寝ている人がいました。特に妙齢の「婦人ですね。私は車両を移動している時にそれを見て、「えっ！この人たちは何をしているのかな？」と。それは寝ている自分の顔を他人に見られたくないという恥ずかしさとか、恥じらいなのではないけれども、最初に見た時は謎でしたね。今は男性でも女性でも電車の中で堂々と寝ています。

——その他、来日された当初と今の日本を比べて、変わったなと感じることは？

公衆での行動パターンはいい意味、随分ゆるくなったなと思います。例えば、昔は女性が朝、電車の中で新聞を開いて読むものなら、ものすごく冷たい目で見られていました。



お父様から贈られた骨董の置物。帰国する度に何かお土産を持たせてくれるのだとか

だらしないということなんでしょうね。

——それは確かに変わりました。今はむしろ、電車の中で新聞を読んでいる女性はカッコいいという時代でしょう？

昔はカッコ悪かったです(笑)。あと、昔は、電車の中でものを飲んだり食べたりするということはありませんでした。特急列車の中以外ではね。

——ああ、駅弁とか。

ゆで卵とかミカンとか特急電車の中はいけれども、それ以外で飲んだり食べたりしませんでした。今はペットボトルができたおかげで、電車の中でふっと一息入れることができますね。

——化粧する強者の女性もいるくらいですから。

隣でやられると、本当にかないませんね。一方、私にとって嬉しいのは、地下鉄で乗り換え方を聞かれたり、たまにですけれども、道を尋ねられることがあるんですね。私が誰かということを知らずに、声を掛けられることが増えました。以前なら、日本人が、明らかに外国人とわかる人に道を尋ねるということは、文化的な行動としてあり得なかったことです。

——それは、日本人の何が変わったからなのでしょう。

おそらく、日本人がオープンになったからではないでしょうか。世界に対して違和感がなくなり、外国人に接することが当たり前になってきたからだ。

今やつていることを、ずっと続けたい。 他に生きる選択肢やイメージが 思いつきませんから

それに日本語を話せる外国人が増えたこともあって、英語を喋らないといけないという恐怖心が取れてきた影響もあるでしょう。いずれにしても、昔に比べて生きやすくなりましたね。

——それでは、最後にこれからやりたいことがあれば教えてください。

私は研究者ですから、やりたいことも仕事の中にあります。理系の研究者たちは違うかもしれませんが、文系の場合は本と紙と鉛筆さえあれば研究できます。ですから、定年を迎えて大学を退職した翌日から研究者じゃなくなるかというと、そうではない。むしろそこから自由に研究できることを楽しみにしている研究者もたくさんいます。

私も一人でできることを長年やってきているので、定年後に全く違うことをやろうという気持ちはありません。今やつていることを、自分が健康でいる限り、そして一緒に学んだり、私が書いたものを読んでくれたり、発信したものを見てくれる人がいてくれる限り、ずっと続けたいと思っています。

——生涯現役ですね。

それが前提ではないかと思えます。他に生きる選択肢やイメージが思いつきませんから。

——人生の幹がしっかりされているからこそこの道ですね。

私は日本文学の研究を軸にしながら、様々な人に出会い、きっかけや機会があつて、情報番組やクイズ番組に出演したり、ラジオ番組でMCを務めるなど、仕事の幅を広げてきました。そんなこともあって、私はきっかけや機会ということをととても大切にしています。

その一方で、バランスも大切だと思っていて、これについては必ずしも上手くいっているとは言えません。調査のために地方を訪れた時など、本当なら3日間くらいそこでじっくり見たり考えたりしたいけれども、仕事をたくさん入れているので1日しかいられないようなこともままあります。

ですから、現役でいるかいないかという以前に、自分の人生のバランスシートをどういう風に整理して、実現していくかということ、これから考えていかなければいけないと感じています。

——今後益々のご活躍を期待しています。貴重なお話、ありがとうございました。

(インタビュー／ライター 更田沙良)